令和３・４年度　港区教育委員会　研究奨励園

自然って面白い！
－小さな発見を豊かな経験につなぐ保育を目指して－

あいさつ

港区教育委員会教育長　浦田 幹男

青南幼稚園は、令和３・４年度　港区教育委員会研究奨励園として、その研究主題「自然って面白い！　―小さな発見を豊かな経験につなぐ保育を目指して―」のもと、２年間にわたり研究を進めました。研究では、教師が一人ひとりの幼児の体験を他の幼児と共有・共感できるようにすることや、幼児の何気ない発見を逃がさずに受け止める視点をもつことを大事にしてきました。この研究により、幼児が体験的に学んだことを、自分の遊びや生活に取り入れて活用するなど、自分の経験に深まりや広がりが見られるようになったことは、大変意義深いものです。

各園・学校におかれましては、本園の研究成果を活用し、質の高い幼児教育の実現や、小学校教育との円滑な接続に向け、より一層、御尽力いただきますようお願いします。

結びに、御指導・御助言を賜りました学習院大学文学部教授　秋田　喜代美　先生、品川区立二葉すこやか園元園長　大竹　節子　先生に感謝申し上げるとともに、研究を進めていただきました　新山　裕之　園長をはじめ、教職員の皆様に心から敬意を表します。

はじめに

港区立青南幼稚園長　　新山 裕之

私たちは、青南幼稚園の恵まれた自然環境の中で、保育できる面白さを感じながら研究を始めました。実践と研究を進める中では、面白いとは何か、豊かな経験とは何かについて自分たちの実践を見直し、立ち止まる時間もありました。しかし、悩むときがあるからこそ研究が前に進み、実践の質を高めることにもつながると考えて取り組んできました。保育の奥深さや難しさを実感すると同時に、やはり面白さを感じるようになっています。

公立幼稚園として質の高い教育実践をすることは自園の子どもたちの育ちはもちろん、地域全体の幼児教育の質を高めることにつながります。そのためにホームページなどを使って積極的に発信もしています。

研究の過程では、たくさんの皆様のお力をお借りしてきました。子どもたち、保護者、講師、港区教育委員会、そしてチーム青南の全ての教職員に深く感謝します。本研究が多くの皆様と保育を語り合うきっかけになれば幸いです。

令和４年１０月２７日

港区立青南幼稚園

研究の内容

１　豊かな経験につながる自然のもつ教育的価値

○幼児は自然と直接関わる中で、心を揺り動かす体験をしている。その感動体験が次の活動への動機付けとなり、幼児の豊かな経験となる。
○様々な感情が芽生える体験を友達と共有し共感し合うことで、より豊かな感情が得られ豊かな経験となる。
○自然現象や生命との関わりなど、思うようにならないことに向き合い、幼児なりに考えることが豊かな経験となる。

２　小さな発見を豊かな経験につなぐ過程

＜幼児の小さな発見とは＞

幼稚園教育要領解説には幼児が自然と触れ合う際の留意点について「幼児が心を動かされる場面は、必ずしも大人と同じではないことにも留意しなければいけない。＜中略＞幼児は日常の何気ない生活場面で心を揺り動かしている。このような幼児の自然との出会いを見逃さないようにすることが教師の関わりとして大切である。（Ｐ．１９５）」とある。本研究では、大人が見過ごしがちな幼児の発見が豊かな経験につながると考え、**幼児が自然との関わりの中で心を動かしている場面を幼児の「小さな発見」と表し**、それを逃さないように読み取り援助していくこととした。

＜保育に自然を取り入れる際の留意点＞
○教師自身が自然に興味をもち、面白がって関わる。
○幼児の自然との関わりが豊かになり、小さな発見が生まれるように園庭の自然環境の整備・工夫をする。
○教師間でエピソード記録を紹介し合い共有する。（保育の振り返りと複数の教師による読み取り）
・季節の変化や幼児が身近な自然との出会いの中で、小さな発見を一緒に共感することを逃さないよう、毎週、保育のエピソードを共有する。学級や学年の枠を超えて視野を広げることで幼児理解を深めるとともに、他の教師の実践や援助を自分の保育に生かす。

実践事例の分析・考察を繰り返し行った結果、幼児の小さな発見を豊かな経験につなぐ過程を次のように捉えた。

教師自身が自然に興味をもち、その教育的価値を踏まえて、幼児の小さな発見が生まれるように環境を整える。

幼児の自然との関わり
小さな発見

小さな発見を豊かな経験につなぐため、教師が幼児の小さな発見を逃さず捉え、読み取り、援助する。

豊かな経験
・幼児が体験的に理解したことを、その後自分で遊びや生活に取り入れたり友達と共有したりして活用すること。
・自然との関わりの中で思うようにならないことに直面したときも、諦めずに試行錯誤すること。
・体験を通して自然に対する愛着をもったり、命の大切さに気付いたりすること。

【経験の深まり】
同じような場面での自然との関わり
○経験したことを再現する
○別の方法を試す

【経験の広がり】
別の場面での自然との関わり
○経験したことを活用する
○友達と経験を共有する

３　幼稚園の生活と家庭が連続性をもつための取組

幼稚園の生活が家庭と連続性をもち、幼児の豊かな経験につながるようにするためには、園の教育に対する保護者の理解が不可欠である。

そこで、本研究に対する保護者の理解を促進するため、新たに以下の２点に取り組んだ。

○ＩＣＴ機器を活用した自然のもつ教育的価値の発信

【取組の例】
・園のホームページで A4版1枚にまとめた幼児の自然との関わりのコラムを発信する。
・保護者向け配信アプリケーションを使い画像を入れた学年だよりの発信回数を増やす。

【保護者の変容】
自然のもつ教育的価値について、理解が深まった。

【幼児の変容】
登園時や休日に親子で見付けた木の実や草花を園に持ってきて、選びに使う、飾るなど大切にするようになった。

＜コラムの例＞

◆コラムの詳細は、下のＱＲコードから御覧いただけます。

○親子で野菜を育てる体験の導入

【取組の例】
1学期に、3歳児が親子で枝豆を植え、登園時に水やりをする機会を設ける。

【幼児と保護者の変容】
・登園時に枝豆を写真に撮るなど、関心が高まった。
・来園した祖父母に育てていることを嬉しそうに伝える姿が見られるようになった。
・欠席連絡の際、枝豆の状態が気になり、教師に確認する声が聞かれるようになった。

【その後の姿】
・保護者が幼児の小さな発見に関心をもつようになった。
・家庭でも野菜の栽培や虫取りを楽しむようになった。

研究のまとめ

研究のまとめを教師の変容、幼児の変容、家庭との連携の成果の３点から述べる。

＜教師の変容＞
○教師自身が自然に興味をもち、その教育的価値を知り、進んで関わるようになったことで、園庭の自然環境の特性を知ることができた。自然の変化による程度の見通しをもち、安全面への配慮もしながら園庭環境の整備や工夫に取り組めるようになった。
○それぞれの幼児の小さな発見を逃さず受け止めようとする姿勢が身に付いた。学年や時期に捉われずぎず、幼児が感じていることを大切にした援助をするようになった。
○実践事例を検討する中で、自然との関わりにおいて正解は一つではないことを実感した。教師が意図した結果に誘導するのではなく、幼児と一緒に悩みながら考えていく姿勢で援助することを意識するようになった。
○幼児が自然との関わりから経験したことを、別の場面でも思い出し活用できるようにするために、幼児の経験を読み取り、つながりを意識し援助するようになった。

＜幼児の変容＞
○間接体験で得た知識に加えて、実際に体験したことを基に考えたり予想したりする姿や、経験したことを生活や遊びに取り入れ活用する姿が見られるようになった。
○自分から興味をもって自然と関わるようになった。また、面白いと感じたことに繰り返し取り組む中で、新たに気付きを得る喜びを感じたり、探究したりする姿が増えた。
○思い通りにならないことに直面しても諦めずに考えたり、別の方法を試そうとしたりするようになった。また、自然との関わりを深める中で、幼児なりに自然への愛着を感じ、命の大切さについて考えられるようになった。
○同じ学年の幼児間で情報が共有されるだけでなく、５歳児から年下の幼児へ遊び方が継承されるようになった。また、果実の収穫や土工場等、本園ならではの環境があることで生まれる活動では、前年度の５歳児の姿や教えてもらったことを覚えていて、期待をもって取り組む姿が増えた。

＜家庭との連携の成果＞
○ＩＣＴを活用した情報の発信は、コロナ禍における参観の機会の減少や欠席者の増加に対して有効であった。幼児の発見を写真で分かりやすく発信した後、降園時や面談等の機会に保護者に個別に幼児の成長を伝えることで、幼稚園教育の理解や幼児の発見を保護者が受け止めることにつながった。自然のもつ教育的価値について保護者の理解を得られたことで、幼児の豊かな経験につながるという成果を得た。
○親子で野菜を育てる体験を導入したことで、自然と関わる体験を親子で共有することにつながり、保護者の幼児理解や自然のもつ教育的価値への理解が深まった。

今後の課題

今後の課題については次の３点である。
・研究を始めた頃は、臨時休業や保育時間の短縮によって教師が園庭の整備に費やせる時間が十分にあったが、現在はその時間が減っている。今後は限られた時間の中でも必要な環境を整えるために教職員間で連携をとりながら工夫して取り組んでいく。
・自然の四季折々の変化を意識して園庭マップを作成したが、長期的な変化を見通した実践は十分ではなかった。教師自身が季節の変化に敏感になり、幼児も変化を感じられるように、園庭の環境を整備・活用していく。
・自然との関わりの中では予想外のことや思い通りにならないことがたくさん起こる。それを面白さと捉え、改善策や別の方法を検討・共有する姿勢で保育に取り組んでいく。

ご指導いただいた先生

＜講師＞

学習院大学文学部教授　　秋田 喜代美 先生　　品川区立二葉すこやか園元園長　　大竹 節子 先生

＜港区教育委員会事務局＞

教育指導担当課長　　篠崎 玲子　　幼児教育担当専門官　　佐々木 勝世　　指導主事　　神村 和輝

研究に携わった教職員

園	長	新山 裕之	主	任	柳井 洋子	主任教諭	井上 円
教	諭	喜名 早智子	教	諭	四方 眞帆	教 諭	森田 貴恵（令和４年６月まで）
教	諭	坂本 咲季（令和３年度）	教	諭	小澤 紅音（令和３年度）	教 諭	藤田 紀子（令和４年６月から）

研究構想図

幼稚園教育要領 ・ 港区教育ビジョン ・ 港区幼児教育振興アクションプログラム ・ 関係諸法令

教育目標　○よく考えて遊ぶ子　○思いやりのある子　○心も体も元気な子

＜本研究を始めるきっかけ＞
・本園にはシンボルツリーのカエデをはじめ、多様な樹木が植えられ、様々な生き物と出合える自然豊かな園庭がある。
・令和2年度全国一斉臨時休業期間に、園庭自然環境の整備に取り組んだ際、教師自身が本園の豊かな自然環境の価値を再確認し、幼児の自然との関わりに着目した研究に取り組み始めた。

＜幼児の実態と課題＞
・自然に興味をもち、戸外での遊びを楽しむ姿が見られる。
・興味があることに関わって遊ぶが持続せず、遊びの楽しさを追究する姿が少ない傾向がある。
・間接体験による知識が先行しがちで、諸感覚で感じ取る体験が不足している。
・虫の飼育への関心は高いが、大切にする気持ちをもちにくい傾向がある。

＜コロナ禍による幼児への影響＞
・遊びや生活の中で、密を避ける配慮やマスクの着用の必要が生じ、他者と体験を共有する機会が不足するようになった。
・年度途中の入退園の多さや、家庭の都合による欠席の増加により、園での共通体験を基にした経験が減り、遊びや園生活の広がり、幼児同士のつながりが希薄になった。

＜目指す幼児像＞
・身近な出来事に関心をもち、自らの諸感覚を通して、感じたり知ったりしたことを活用する幼児
・自分なりに考え、面白さを感じたり、友達と一緒に考え、面白さを分かち合ったりする幼児
・季節ごとに変化する自然環境や命の大切さに気付き、思いやりの気持ちをもって行動する幼児

【研究主題】
自然って面白い！
― 小さな発見を豊かな経験につなぐ保育を目指して ―

＜研究の仮説＞
・教師自身が自然に興味をもち面白がって関わり、幼児の小さな発見を逃さずに受け止め、自然との関わりを深めるように援助することで、幼児の小さな発見が豊かな経験につながり、目指す幼児像が実現するであろう。
・幼稚園の生活が家庭と連続性をもつことで、幼児の豊かな経験につながるであろう。

＜研究の目的＞
1　教師自身が自然と直接関わる体験や、実践・事例検討を通して、幼児の豊かな経験につながる自然のもつ教育的価値を明らかにする。
2　実践事例の読み取りを深める中で、自然を保育に取り入れる際の留意点を明らかにし、幼児の小さな発見を豊かな経験につなぐ過程で必要な教師の援助を導き出す。
3　幼稚園の生活と家庭が連続性をもち、幼児の豊かな経験につながるようにするための連携の方法を探る。

＜研究の方法＞
・ＳＤＧｓの理念に基づいた、園庭の自然環境の維持と、季節の変化や特性に応じた自然環境の整備と工夫
・教員間でのエピソード記録の紹介と共有、実践事例検討
・講師を招いての研究保育、オンライン（Ｚｏｏｍによる）保育研究協議会等による実践事例検討・考察
・ＩＣＴ機器を活用した保護者への自然のもつ教育的価値の発信・共有
・親子で野菜を育てる体験の導入

4　豊かな経験の深まりと広がり

…小さな発見　…教師の援助
…経験の深まり　…経験の広がり

豊かな経験は、時として経験の深まりや広がりにつながることがある。そのことを教師が理解し、それぞれの幼児に応じた援助をすることで、経験の多様性と関連性が生まれ、さらに豊かな経験につながることが分かった。

以下の図は、5歳児6月のジャガイモの収穫から始まった、経験の深まりと広がりの例である。

6月　ジャガイモの収穫
「たくさん収穫できて�उしい！
幼稚園のみんなで食べられる数あるかな？」

・「みんなで食べたい」という幼児の思いを聞き、数を数えることを促した。
・ジャガイモを数えることを予測し、幼児でも扱いやすい10個入りの卵パックを遊びの中で掲示しておいた。

「卵パックが数えやすいね。」

・「来年は、みんなで食べられるといい」という幼児の思いを聞き、お礼肥をすることにした。

10月　ブドウの収穫
「ジャガイモみたいに幼稚園のみんなで食べるには、少し足りないかな・・・。」

・幼児が実を並べて数えられるように白い紙を用意した。
・幼児が10個ずつ実を置いた白い紙が何枚あるかが分かるように、白い紙に1から順に番号を書くことを提案した。

10月　ザクロの描画
「実がいろいろな色で面白い！
絵に描いてみたいな。」

10月　ザクロの収穫
「実がいっぱい！
中はどうなっているのかな？」

「全部数えられた！
こんなにたくさんあるんだ！」

2月　生活発表会
「幼稚園の思い出を物語にしよう！
カキをたくさん収穫して数えたの、
嬉しかったし楽しかったね。」

11月　カキの収穫
「たくさん収穫できてびっくり！
今度こそみんなで食べられるかな？」

「ジャガイモとザクロのときみたいに数えてみよう。」

11月　園庭地図の作成
「拾った落ち葉を貼って、園庭の地図を作りたいな。園庭の真ん中にカキを並べて数えたよね。」

小さな発見が生まれる自然豊かな園庭マップ

令和４年度　現在

自然現象に関する実践
植物に関する実践
生き物に関する実践

◆各実践事例の詳細は、下のＱＲコードから御覧いただけます。

本園の園庭の自然環境の豊かさは、歴代の教職員が計画的に四季の変化を告げる樹木や実のなる木の植樹、ビオトープ等の整備を持続してきた結果である。また、現在の教職員も季節に応じ、幼児が自然のもつ興味深さや面白さを享受できるように、また伸び伸びと戸外で遊べるように、自然環境の整備を続けている。このことにより、幼児の小さな発見が生まれるよう環境となっている。　内は、幼児の小さな発見が生まれるようにするための環境の構成や留意点である。

No. 1　ヤゴとオタマジャクシ
2つの命をめぐり、葛藤する幼児と教師
（5歳児　5～6月）

竹やタケノコが生えている。定期的に剪定し、幼児が安全に遊べるようにしている。また、剪定した竹を栽培している植物の支柱にしたり、描画に使う竹筆や作品展の素材にしたりするなど、幼児が遊びに取り入れられるようにしている。

No. 2　ぼくのおかげで氷ができた！
（5歳児　1月）

土工場は、腐葉土作りの場である。日頃から落ち葉や雑草を幼児と運び、土作りの仕組みを幼児に伝えることで、幼児が自然を大切にする気持ちをもてるようにしている。
※下部、土工場の取組参照

No. 3　豊かな経験につながる
豊かな実りと収穫
（5歳児　6～11月）

裏庭にあるカキは毎年豊作である。5歳児と一緒に収穫することで、他学年にお裾分けしたり経験したことを遊びに取り入れたりして、その後につながっていくようにしている。

四季に応じた変化を見通し、トンボやカエルなど様々な生き物が訪れるように、藻を取るなどの手入れをしている。

花びらは色が出やすい、ガクは特徴的な形をしているなど、ザクロのもつ特性を教師が理解し、幼児が気付いて遊びに使えるようにしている。

収穫期だけでなく、日頃から果樹の様子を幼児と共に見に行ったり剪定などの手入れをしたりすることで、幼児が生長に気付き、期待感を高めていけるようにしている。幼児が収穫する喜びを感じ、共通体験となるようにしている。

築山は周りが樹木で囲まれており、幼児が落ち着いて集える場所である。葉や花をままごとに使ったり果実を近くで見たりして、幼児が身近な植物を取り入れて遊べるようにしている。

No. 4　ダンゴムシに触れた！
（3歳児　6月）

No. 5　遊びが生まれるカエデの木
（4歳児　1月）

No. 6　どこの砂にしようかな
（4歳児　1月）

畑を活用することで、幼児が全身を使って収穫の体験をできるようにしている。野菜を育てる前に幼児と一緒に土を耕したり、栽培中に土寄せや芽かきをしたりして、幼児が栽培している植物に関心をもてるようにしている。

No. 7　触ってびっくり！
（3歳児　6月）

プランターを活用することで、日当たりや保育の状況に合わせて場所を移動できるようにしている。また、3歳児では幼児が興味をもちやすいよう保育室前にプランターを置くなど、実態に合わせて置き場所を変えるようにしている。

遊びに活用するために植えている草花
オシロイバナ・アサガオ・バジル・ミントなど

昆虫を呼び込むために植えている草花
ミカン・スミレ・アベリア・ツツジなど

土工場（自然を大切にする心を引き継いでいくための新たな取組）

※右頁　実践事例「５歳児との土作りの経験を通して」参照

世界共通の目標としてＳＤＧｓが重要視されている。本園では、「園庭の自然環境を大切にし、幼児が関わる体験を十分得られるように工夫すること」が、間接的にではあるが、ＳＤＧｓの理念を保育に取り入れることにつながると考え、研究の一環として土工場の取組を始めた。

土工場（腐葉土作りの場）の取組

本園では、令和２年度に裏庭に穴を掘って土工場を作り、５歳児が中心となって腐葉土作りをしている。裏庭に落ち葉を集めたり、青南特製マシーン※でサラサラの土を作ったりする土作りの仕事は、５歳児から年下の学年へと、本園ならではの特色ある自然環境を生かした取組として引き継いでいきたい。

※ビールケースと目の粗いカゴを用いたもの。カゴに土を入れてふるうと、不純物はカゴの中に残り、サラサラになった土が下に落ちる仕組み。

カキを収穫し、お礼肥を施す。

小さな発見
・石や根がカゴに残り、サラサラな土が下に落ちることに気付いた。
・土がフワフワしていることに気付いた。

５歳児から４歳児へ
土作りの仕事を引き継ぐ。

翌年、前年度の５歳児から教えてもらったことを生かす。

豊かな経験
・前年度の５歳児に教えてもらったことを思い出し、自分たちもやってみようとする。

豊かな経験
・どうすればよりよい土になるか自分たちで考え、試してみる。

質のよい土にするための土作り
虫の棲み処にも生かす。

年下の学年に伝える。

豊かな経験
・４歳児に土工場の仕事を教えてあげようとする。

引き継がれていく

実践事例の紹介

研究に沿った実践を重ね、検討する中で、幼児の小さな発見と豊かな経験を捉え、それらをつなぐために必要な教師の援助を導き出した。ここでは、その実践事例の一つを紹介する。

実践事例　４歳児　９月～１０月「５歳児との土作りの経験を通して」

～小さな発見が生まれる～　　下線部は小さな発見を豊かな経験につなぐ教師の援助

１日目：土作りの方法を５歳児に教えてもらおう

４歳児が夏野菜を植えていたプランターを片付ける際に、取り出した土を再利用する処理の仕方を５歳児に教えてもらうことにした。幼児は喜んで手伝い、共同作業を楽しんでいた。土をふるってカゴの中に残ったものを「宝物発見です！」と見付けると、５歳児から「ひげ(根)は土に混ざらないように取るんだよ。」と土工場に運ぶことを教えてもらった。教師は、幼児が気付いたことを受け止めたり、残った不純物を一緒に土工場に運んだりした。

【小さな発見】
・５歳児のしていることに興味をもち、一緒にする喜びを感じた。
・カゴの中に根や鉢底石が残ったことに気付いた。

～豊かな経験へ～経験の深まり（同じ場面での再現）

２日目：自分たちで土作りをしてみよう

翌日も夏野菜の後片付けをすることにし、「今日は５歳児が手伝いはできない。」と伝え、自分たちだけでする意欲を引き出すとともに、５歳児との取り組みを思い出せるようにした。A児が張り切ってビールケースを取りに行き、B児やC児も何が必要か思い出し、スコップやカゴを持ってきて土をふるう準備をした。前日の土の感触を思い出しながら土をふると、できた土は水分が多くしっとりしていた。触りながら考え、「もっとフワフワにしよう。」とふるう作業を続け、感触を確かめていた。

その後も、数日に分けて夏野菜や、草花のプランターをきれいにする活動を取り入れ、繰り返し土をふるう経験が幼児に定着するようにした。

【豊かな経験】
・土作りの仕方が分かり、５歳児に教えてもらったことを自分たちだけでできる喜びを感じた。
・ふるった後の土の質が前日と違うことに気付き、もう一度ふるってみようとした。
・カゴに残った不純物が土工場の栄養になることを知り、自分たちで裏庭の土工場に運ぶようになった。

～豊かな経験へ～経験の広がり（違う場面での活用）

２週間後：カブトムシの幼虫の土をきれいにしよう

週明けの朝、カブトムシの幼虫の様子が気になるD児が「ウンチが増えているかも。」と言い、飼育ケースの中を見ながら「（糞が）ある！」と気付いた。他の幼児も集まってきたので、教師が新聞紙を持ってきて、糞と土を分ける作業をする場を整えた。D児は手で糞を集めていった。

しばらくするとD児は飽きた様子であった。教師が「どうしたら集められるかな。」と問い掛けると、A児が「いいこと考えた！年長さんの！野菜の土をきれいにしたやつ！！」と言って園庭に行き、砂場のふるいとバケツを持って帰ってきた。それを見たD児、何をするのか気付き自分の分を取りに行った。A児とD児が「（糞が）いっぱい集まったね。」と嬉しそうに見合いながら、一緒に残りの土をふるいにかけて糞を取り出した。

【豊かな経験】
・土の中から糞を取り除く方法に、土作りで使ったふるいを使えることに気付きやってみた。

【幼児の小さな発見を豊かな経験につなぐ過程で必要な教師の援助】

○幼児同士で伝え合う機会をつくることが、幼児の興味や意欲を引き出す。
・５歳児に教えてもらう機会をつくることで、憧れの気持ちをもって取り組み、次の日には自分たちでする意欲をもつ姿につながった。
○繰り返し体験する機会を取り入れることで、自分の力で活用できる経験となる。
・ふるう活動を繰り返し取り入れたことで、ふるいの仕組みや用途を理解し、カブトムシの糞を取る場面でも活用することができた。